

4 「共生と平和の科学」

『子どもの人権』『環境』『ジェンダー』を軸に共生と平和を考える
—研究協議会報告・生徒集録から読むテーマ選択の動機と結果—

佐藤良子・原 順子
高橋伸行・三小田博昭

【抄録】 本講座の軸である、『子どもの人権』『環境』『ジェンダー』は、高校生に共生と平和を考えさせる題材として授業者が設定したものである。生徒はこのテーマをどのように受け止め、3つのうち1つを選択するのか。4年の実践の中で我々には、毎年作っている生徒集録という財産がある。今回は研究協議会で公開した授業実践報告と05年度の生徒集録を中心に、生徒のテーマ選択の動機とその結果を探り、考察をする。

【キーワード】 新教科 共生 平和 子どもの人権 環境問題 ジェンダー KJ法

1. はじめに

「共生と平和の科学」が、高2の後期に必修科目として開講されて4年になった。この間、2回の研究協議会と、東大の秋田先生を招いた授業研究会などを通して、多くの先生方に観ていただいた。教科書のない科目であるが、アドバイザーの野田先生や高井先生、共同研究者の佐藤先生のサポートをはじめとして、いろんな方々の助言でよりよい授業内容・形態を模索してきた。学習内容は、研究協議会で行った、公開授業の報告にとどめる。これまでの研究内容や成果と課題については、過去3年間の本紀要をご覧いただきたい。

さて、授業研究の場でたびたび受ける質問がある。それは、「生徒はどうやって3つのテーマから1つを選ぶのか」という質問である。05年度の研究協議会分科会でも同様の質問があった。そこで今回は毎年作成している生徒の集録から、生徒が1つのテーマを選ぶ時の動機とその結果を探り、授業実践とともに報告する。

2. 研究の歩み

1) テーマについて

新教科群とは、2000年度から併設型中高一貫校の新しい教育プログラムとして、本校が設定した教科である。その1つ「共生と平和の科学」は、現在起こっている地球上の諸問題を「子どもの人権」「環境」「ジェンダー」という具体的・多面的な視点から探究し、地球市民として解決に向けて自分たちに何ができるかを科学的に学ぶ講座である。

2) 設定の背景

近年、地球規模の自然環境破壊や、南北格差など集団間の諸問題は、大きな社会問題になっている。関連するこの2つの問題の現状を把握し、よりよくするためにできることを考えていくと、「共生」という共通の原理が見

えてくる。共生とは「分かち合い」である。そこから「平和」の概念を導くこともできる。そこで、この問題を生徒が自分たちの課題として捉えるために、新教科群の中に「共生と平和の科学」を立ち上げた。『子どもの人権』『環境』『ジェンダー』の3つは、共生社会の実現には欠かせないテーマであるとともに、対象が具体的でわかりやすく、かつ、互いに結びついているテーマであるため選んだ。単独で、あるいは合同で学び合うことにより、考えを深め、共有し、問題を多面的な視点から探求し、分かち合う責任や幸せを気づかせたい。

3) 授業目標

- ①地球上の様々な集団が互いに認め合い、平和に共生共存できる可能性を探ることができる。(認知的目標)
- ②同じ時代を生きる身近な人々や地球上の遠く離れた人々の生活に関心を持つことができる。(情意的目標)
- ③共生社会の実現のために自分たちに何ができるかを考えて行動することができる。(態度的目標)

4) 授業計画(表1:2005年度「共生と平和の科学」 TEACHING PLAN参照)

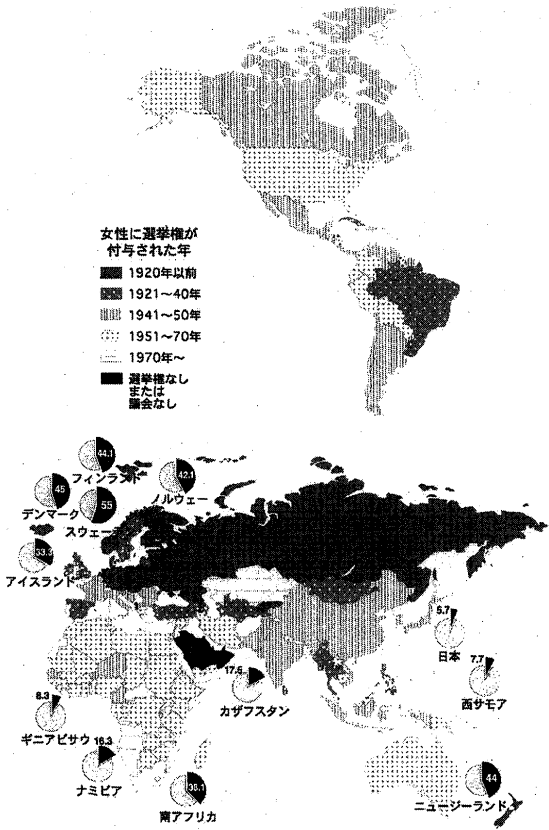


表1 2005年度 「共生と平和の科学」 TEACHING PLAN

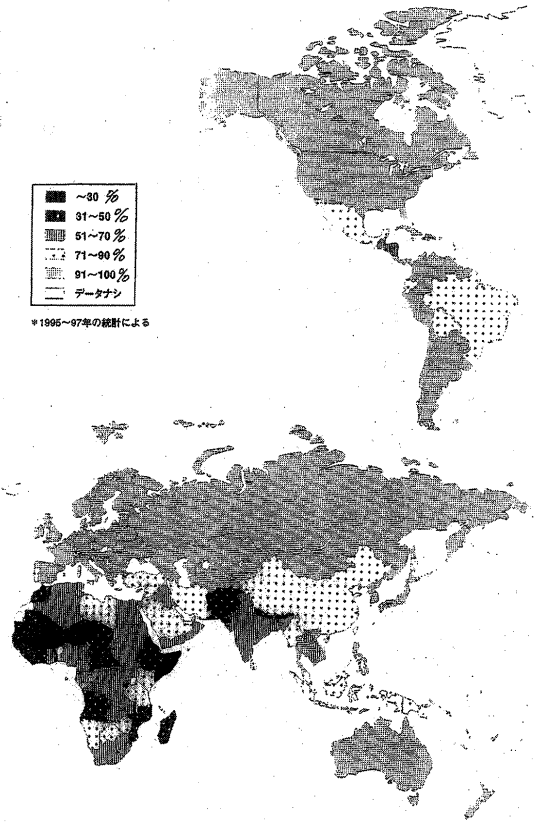
テーマ			『子どもの人権』 —貧しさと豊かさ—	『環境』 —ひとと地球—	『ジェンダー』 —女と男—
内 容			子どもの人権に焦点をあて、世界の子たちを垣間見ながら、自分たちの今の生活を振り返る。	「自然」と共存するとは、限られた資源のもとで人々が共に暮らすとは。「環境ブーム」の今、改めて問い直す。	共に生きる家族、友達。身近な共生と平和をジェンダーの視点から探る。身近なことだと思っていると…。
担 当			三小田・佐藤	高橋・佐藤	原・佐藤
回	月	日	導 入 (問題に気づく)		
1	10	14	オリエンテーション① 「共生と平和の科学で学ぶこと」 ★		
2	10	21	オリエンテーション②—テーマガイダンス—「100人の村」(三小田) 「小さな地球」(高橋)「セックスとジェンダー」(原) グループ希望調査		
探 求 I (現状を知る)					
3	10	28	子どもの権利条約 ユニセフ	熱帯雨林の姿	ジェンダーを見つけよう 「らしさ」と「好ましさ」
4	11	4	子どもについての カルチャーアシミレータ	環境問題を見直す 武田邦彦工学部教授	メディアリテラシー① 新聞・雑誌から読み解く
5	11	11	リプロダクティブヘルス・ ライツ 担当(佐藤) ☆	ちょっと待ってケナフ	リプロダクティブヘルス・ ライツ 担当(佐藤) ☆
6	1	25	環境学のランチ ☆	環境学のランチ ☆	世界の中のジェンダー① HDIとGEM
7	12	9	中間報告会 (World meters) ★		
探 求 II (問題を深める)					
8	12	16	アドバンスアカデミー 留学生招待 アイスブレーキング	アドバンスアカデミー 留学生招待 アイスブレーキング	アドバンスアカデミー 留学生招待 アイスブレーキング
冬休み課題 「メディアリテラシー TV・映画が発するもの」 レポート					
9	1	13	アドバンスアカデミー 留学生招待 ディスカッション	アドバンスアカデミー 留学生招待 ディスカッション	アドバンスアカデミー 留学生招待 ディスカッション
11	1	20	児童労働の現状	文化と性役割観 ☆ 高井次郎教授	文化と性役割観 ☆ 高井次郎教授
ま と め					
12	2	3	日本のODA	冷静な環境学	世界の中のジェンダー② ノルウェーに学ぶ
13	2	10	研究協議会『持続可能な地球社会のために自分たちにできること』 ★		
14	2	17	『持続可能な地球社会のために自分たちにできること』 振り返り ★		
15	3	3	集 録 書 き ★		
16	3	11	ビデオ聴講「NHKスペシャル63億人の地図—希望の町へ都市再生への挑戦」 ★		
16		17	集 録 綴 じ ・ ア ン ケ ー ト★		

★3グループ合同授業 ☆2グループ合同授業

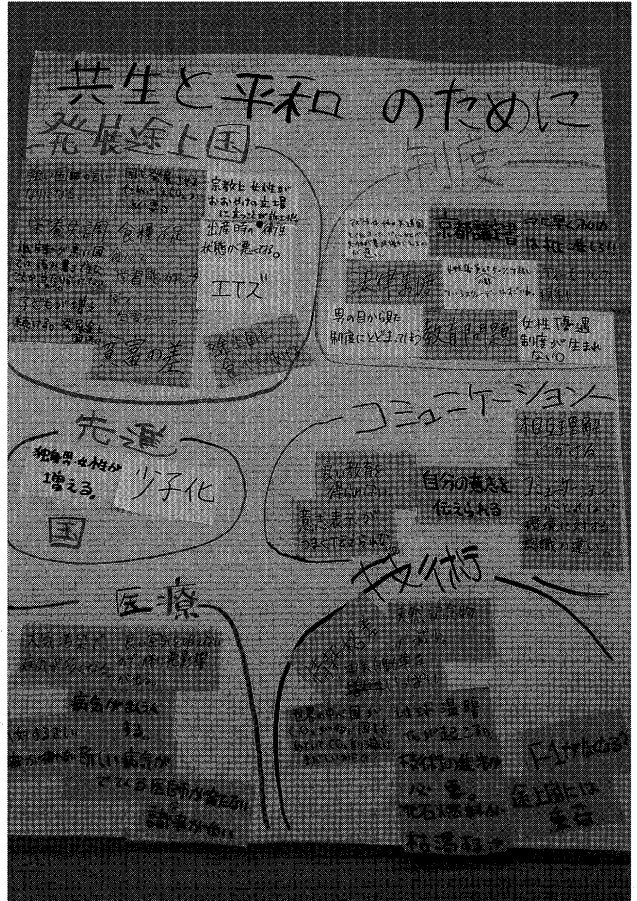
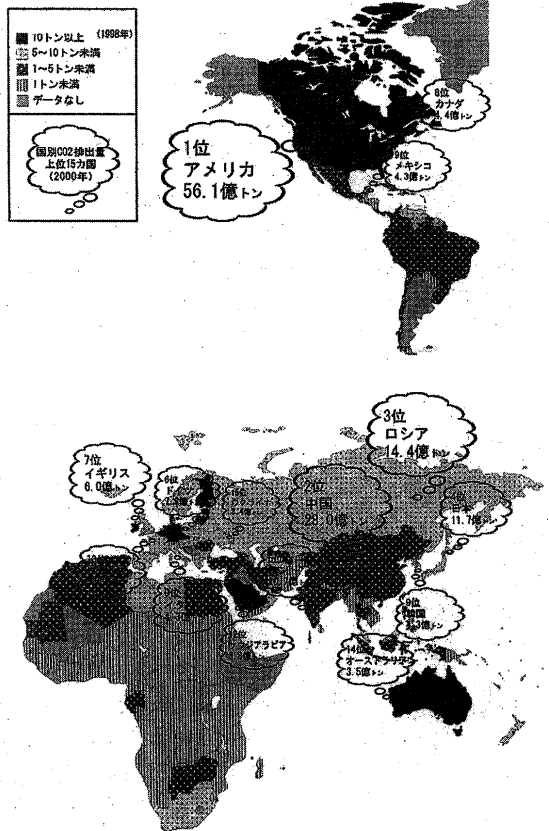
図表A



図表B



図表C



5) 学習方法と形態

① T. T.

1学級に教員の3人と1人の共同研究者、4人指導体制で授業を行う。教員3人は1つずつ小テーマを担当し、少人数テーマ別授業を展開する。また必要に応じて、2グループ合同、3グループ合同とリンクしながらT. T. で授業を展開する。

② 大学連携

主に名古屋大学から、テーマに関する研究者を招いて、専門的な内容の講義を行う。

③ 意識変容・自己決定型学習

講義で得た知識を主体的に活用できるように、ワークショップ形式の授業を行う。

④ 学び合い学習

グループワークの中で他者と交流し、共感や違いを通して共生共存できる可能性を探る。

6) 評価について

3つの目標に照らして、それぞれが達成されたかを授業中の様子、提出ワークシート、集録などからみて、5段階(既成教科と同じ)で評価する。

3. 研究協議会公開授業報告

1) 日時・場所

2006年2月10日(金) 1~2限(10:00~11:50) 第1総合教室

2) 学年・生徒

高校2年C組(39名)

3) 授業の主題

『持続可能な地球社会のために自分たちにできること』
この授業はTEACHING PLANにあるように、導入→探究①現状を知る→探究②問題を深める→まとめ、の流れの中で、「まとめ」に位置する。

2) 目標

- ① 3つのテーマから、人間開発に関するデータを読み解き、互いの関連に気づくことができる。
- ② 持続可能な地球社会のために、自分たちができるアクションプランを考えることができる。
- ③ 自分たちが考えたプランを発表しあい、学びを分かち合い、共生社会の実現のために行動することができる。
(評価はそれぞれの目標が達成されたかどうかによる。)

3) 準備するもの

・ワークセットを5セット(グループ数)

・データ3種類: 図表A・B・C参照
(出典: 『UNDP』『JICA世界の諸問題』)
・付箋紙3色 各10枚 ・マーカー(8色セット)

4) データの解説

① 図表A: ジェンダー『女と男』のデータ

出典はJICA—世界の諸問題>教育・ジェンダー>女性の社会参加 (<http://www.jica.go.jp/world/issues/kyoiku02.html>)

この図表は2つのデータを示している。地図は女性に選挙権が付与された年を指す。(2002年3月18日現在。選挙権が同一条件で認められた年) 図中; ■なし、とは選挙権なし、または議会なし、と言う意味である。『女性の政治参加をリードしているのは北欧諸国だ。部分的にはあるが、スウェーデンでは1861年に女性の選挙権を認め、第一次世界大戦と前後してヨーロッパの多くの国が女性の選挙権を認めている。南アフリカの女性に選挙権付与されたのは1994年と世界で最も遅いが、女性に議席の3分の1を割り当てる制度を導入し、女性の社会参加が急速に進んでいる。

円グラフは閣僚レベルの女性の割合を指す。1915年以前に女性に選挙権が付与された5カ国と、1975年以降の5カ国に加え、最も多いスウェーデン、そして日本の12カ国のデータである。

② 図表B: A子どもの人権『貧しさと豊かさ』のデータ

出典は国際協力2003March JICA

このグラフは成人の識字率を示している。文字は人間が生きていく上で最低の情報を入手する道具。それゆえ字の読み書きができないことは識字者との間に大きなギャップを生む。

15歳以上の成人で読み書きのできない非識字人口は世界で8億8400万人と言われている。そのうち3分の2以上がアジア・太平洋地域に集中している。国や地域によって、識字率の男女格差も大きく、南アジア諸国では5%から35%の格差があるという。また過去20年の推移をみるとインドやパキスタン、バングラデッシュ、アフガニスタンなどでは非識字人口が増えているとの報告もされている。

③ 図表C: 環境『ヒトと地球』のデータ

出典: JICA—世界の諸問題>環境>二酸化炭素排出量と地球温暖化 (<http://www.jica.go.jp/world/issues/kyoiku01.html>)

地球温暖化にはさまざまな要因が挙げられるが、その一つが二酸化炭素(CO₂)排出量の増加。産業の発展と人口増加に伴い大量の石油や石炭が消費されるようになると、大気中のCO₂の量は急増した。

1997年、京都で地球温暖化防止会議が開かれた。しかし最大のCO₂排出国であるアメリカは京都議定書へ

の不参加を表明。また、これまで大量にCO₂を排出してきた先進国が開発途上国にも削減を求めることに対し批判的な声もある。二酸化炭素は産業活動が活発な国ほど排出量が多い傾向にある。1人当たりの排出量では、カタールやアラブ首長国連邦などの産油国と並

び、アメリカ、シンガポール、オーストラリアなどが上位に顔を出す。国別の排出量はアメリカがダントツで、2位の中国の2倍にもなる。地図の塗り分けは一人あたりの二酸化炭素排出量、吹き出しは国別二酸化炭素排出量上位15位を示している。

5) 授業の流れと学習活動 図表2 参照

図表2 学習活動

時間	授業の流れ	生徒の活動	学習の支援
0分	本時の学習計画を知る	指定されたグループの席に座る。 (7~8名×5グループ)	・3つのテーマが均等に入るグループを5グループづくり、座席表で指示をする。 ・本時の活動内容を大まかに伝える
5分	①データを読む ・発表する	・3種類のデータを見て、これまでの学習得たことから、どのテーマに関係するデータか、書かれている内容などを読み解く。 ・テーマとデータ項目とその根拠を発表する。	・『子どもの人権』『環境』『ジェンダー』から1つずつデータを提示し、国名 ・順位・数値などに着目させながら読ませる。 ・挙手により発表させる。挙手がなければ指名する。 ・発表後、データ項目と出典を明らかにする。
20分	②カテゴリーに分ける	・データから見えてくる諸問題を、たくさん付箋紙に書き出す。 ・テーマ別に書き出した問題点をグループ内で見せ合い、説明し合う。 ・各テーマを離れて、違う観点から問題点をカテゴリーに分け、模造紙に貼る。	・『子どもの人権』はピンク、『環境』はブルー、『ジェンダー』はイエローと、テーマ別に色分けして紙に書かせる。 ・カテゴリーのくくり方は自由に考えさせるが、数は4~6を適当とする。
40分	③タイトルをつける	・くくったカテゴリーに、観点や内容を一言で言い表すようなタイトルをつける。	・タイトルの例をいくつかあげ、活動がスムーズに進行するようにする。
60分	④アクションプランを考える	・タイトルをとっかかりとして、持続可能な地球社会のためにすべきことを考える。 ・その中から、自分たちができるアクションプランを考え、ケント紙に書く。	・持続可能な地球社会には、持続可能な開発が必要であることを補足する。 ・今の自分たち、これからの自分たちにできることに分けて具体的に考えさせる。
80分	⑤発表する	・グループごとに模造紙を見せ、アクションプランを発表する。 ・他のグループのプランを聞き、自分たちにできることを分かち合う。	・挙手がなければ指名して発表させる。 ・質問や感想を言えるように時間配分に気を配る。

6) 成果と課題

①データの読み解き

データに直接結びつく授業をしていなかったため、生徒はデータを見てわかるのだろうか、心配であったが、生徒はデータをかなり正確に読み解いていった。自分学んだテーマを中心に、他テーマの生徒に説明したり質問したりする中で数値の単位、出ている国名などから判断したようだ。

発表例

A: 『ジェンダー』女性が社会進出を果たした年代別のグラフ

根拠; 北欧のデータがあり、しかも高い数値だから。
北欧はGEMが高いと学習したから。

評; 北欧のデータがあることが、ジェンダーに関する図表と読んだのは学習の成果だ。しかし、社会進出を果たす、具体的な指標が選挙権だ、というところまでは考えが及ばなかったようで残念である。円グラフの日本のデータが低いのも、この図表がジェンダーについてのものだという手がかりにもなったようである。

B: 『子どもの人権』就学率グラフ

根拠; %で表されているから。先進国(北半球)で高く、アフリカなど(南半球)で低いから。

評; 就学率ではなく成人識字率のグラフである。しかし、この二つは関連し合っている。子どもの人権を中心に学習を深めてきているが、教育を

受ける機会を十分に与えられていない地域の子
どもたちは、成人してからも識字率が向上する
訳ではない。非識字のために成人後のほうがか
えって生きていく上で問題を抱えることのほう
が多い。

C：『環境』二酸化炭素の排出量のグラフ

根拠；単位がトンでアメリカが1位だから。著しく発
展している中国が2位だから。

評；消費大国アメリカを1位、経済発展著しい中国
を2位にという判断はきわめて妥当。環境問題
が単なる自然科学の問題ではないことに着目で
きており、学習の成果が活きた。いわゆる環境
問題の学習において、比較的よく扱われる素材
であるため、解答が容易であったともいえる。

②アクションプラン

発表例

- ・正しい知識を得る。
 - ・人材育成をする。
 - ・教育制度を整える。
 - ・新しい技術の発明をする。
 - ・国は制度を決めるだけでなく、それを援助する。
 - ・NGO、ODAなどの組織を充実する。
 - ・国際交流の場を増やす。
 - ・私（女子生徒）が国会議員になる。
 - ・独身税を定める。
- ③生徒の感想（振り返りワークシートより）
- ・グラフ1つでも様々なことを考えることができるんだ
な、と思いました。日常生活でもなかなか周りを見れ
ないことがあるけど、これからはもっと自分の視野を
広げていかなければならないと思いました。少しずつ
でもいいから、自分にできることをやっと思い
ました！！
 - ・自分にできることを一生懸命やるのが大切なのは
ないだろうか。偏見にとらわれず、調べて学び、知る
ことが必要である。
 - ・やっぱりどの点においてもアメリカの影響は絶大であ
るようですね。世界を変える力を持っているのは、ア
メリカと中国です。
 - ・国同士が助け合わないと、解決できないことがたく
さんあるんだなと思った。意識の改革が必要かも。私た
ちももっと意識向上を。
 - ・他の班や個人個人の意見を知ることが出来たのが良
かった。
 - ・世界で起こっている色々な問題を、色々なカテゴリー
に分けるのは非常に難しいことがわかった。
 - ・いろいろな素晴らしい解決策を苦勞して考えたから、
ぜひこの意見を大切にしたいです。



④成果と課題

この授業は、書き出し、カテゴリーに分け、タイトル
をつけるという作業の中で思考を深め、目標を具体化す
るという、KJ法を参考に組み立てた。KJ法はグルー
プ学習の良い点である「学び合いながら個人の考えを深
める」ことに優れている。今回もグループ内での話し合
いは進み、授業の目標①、②は達成できた。しかし、ア
クションプランを発表する時間が足りなくなって、全グ
ループが簡単に発表するのが精一杯で、他のグループの
プランについて討論することができなかった。データから
見えてくる諸問題を、たくさん付箋紙に書き出すこと
に時間がかかったためだ。書き始めるまでの考える時間
も必要である。どの程度具体的なことか、抽象的でよい
のか、一例を教師が示すのはあえてしなかったが、待つ
時間が長く感じられた。3つのグラフは、各担当者がそ
れぞれに選んだ。4年間の実践の中で教師も合同授業や
打ち合わせの中で学んだことが多く、自分のテーマから、
ここで必要なデータは何かを見極めるのは難しくは
なかった。ただ、見た目にも比較しやすいグラフを探す
のが大変で、JICAの出している世界地図が描かれて
いるものに落ち着いた。課題は、生徒が考える時間や考
えたことを大切にしつつ、より目標に近づくように時間
配分をして、発表による学び合い機会も確保すること
である。



3. 生徒集録から読むテーマ選択の動機と結果

1) 動機 (1 クラス分の集録の要約)

①子どもの人権『貧しさと豊かさ』

- ・生活に何の不自由もない国もあれば、生きていくのが大変な国がある、という問題について知りたかったから。
- ・国際関係学、特に文化の違い、民族の多様性に興味を持っていたから。大学で学びたいとも思っている。
- ・生まれた国の経済性や環境の違いでそこに生きる人々の生活がどう変わるか知りたかったから。
- ・貧しい人がどれだけいるか興味が湧いた。
- ・自分の「貧しさ」に対するイメージが不確かだからもっと知りたくなった。
- ・ガイダンスの「世界がもし100人の村だったら」に感動して。
- ・世界の争いの種になっているのは「貧しさ」だと思ったから。
- ・以前読んだ「世界がもし…」の現実を知りたいと思ったから。
- ・3つの中で、自身が唯一客観的に見られると思ったから。
- ・国際関係に興味があったし、日本はどっちなんだ、と疑問が湧いたから。
- ・世界の同年代の子どもたちはどんな生活を送っているのか知りたかったから。
- ・本当に追い求められるべき「豊かさ」とは何か考えたかった。
- ・「子ども」というキーワードにひかれた。私は子どもが好きだから。

②環境『ヒトと地球』

- ・ちょっと変わったのにしてみよう、という軽い気持ちから。
- ・環境問題について以前から興味を持っていたから。
- ・環境に興味があり、やりたいのがこれしかなかったから。
- ・環境問題の問題を知る良い機会だし、自分に一番身近だと思ったから。
- ・環境問題に興味があり、ヒトと地球が共生していくには知識が必要だと思ったから。
- ・自分にとって一番身近な問題だから新しい知識を得ようと思った。
- ・環境について様々な問題が発生しているが、人間にいいように操作されていると思っていたから。
- ・最近世の中で騒がれている「環境」について学んでみようと思ったから。
- ・現在、環境問題はよく取り上げられるけど、私達にできることの答えが見つかるかな、と考えたから。
- ・ガイダンスでこれから何をやっていくのかが、想像も

つかなくておもしろそうだったから。

- ・理系人間だからという意外に、ヒトの役に立つ科学の「使い方」を知ることができれば、と思った。
 - ・本当の地球は今どのような状況で、自分は何ができるのか知りたいと思った。
- ##### ③ジェンダー『女と男』
- ・この地球上には女と男しかいない、という当たり前のことを忘れていたことに、自分が気づいたこと。
 - ・『共生と平和』に関してこの「女と男」はすごく身近なことだと思ったから。
 - ・なぜ、「美人」「色白」は女だと思われてしまうのか、そのギモンを解いてくれそうだったから。
 - ・ガイダンスが印象的で、もっと男女の違いなどを知りたいと思ったから。
 - ・第一希望は「ヒトと地球」だったが人数の関係で「女と男」になった。
 - ・以前読んだ小説の、親から「女なんだから音楽学校へ行け」といわれたシーンに強い衝撃を受けていたから。
 - ・均等法など、当然のことをわざわざ法律化する事実に違和感を感じていたから。
 - ・3つの中で、最も人間の本質に迫ることができるだろうと思ったから。
 - ・高1の総合人間科で「男女差別とセクハラ」を選び、その中で知ったジェンダーに興味を持っていたから。
 - ・とりあえずジェンダーが一番身近で目につくことが多いだろうと思ったから。
 - ・国際的に「男女」という差が縮まろうとしていると思ったから。

2) 動機別にみる生徒の考察 (結果)

①子どもの人権『貧しさと豊かさ』

【動機が『本当に追い求められるべき「豊かさ」とは何なのだろうか?』という生徒のまとめ】

この授業を受けて、さまざまな立場に置かれている子どもたちを目もあたりにしました。目をそらしたくなる風景ばかりだったけれど、どれも自分と同じ時間に生きている人々の姿でした。自分たちは今、自らの生活をさまざまな単位で計っているけれど、そんな数の大小では得ることのできない「豊かさ」があるのではないかと感じました。身のまわりにたくさんの物がある生活が、当たり前ではないということにも改めて気付きました。今すぐに何かを変えることはできないけど、目に見えるものだけにとらわれないで、単位のないものを大切にしていきたいと思います。そして、一人ひとりの小さな優しさが世界をつなげていけたらいいなあと思います。

【動機が『貧しさと豊かさの違いは、今もこれからもすごく重用な課題だと思い知っておくべきだと思ったから』という生徒のまとめ】

この授業を受けて得たものはたくさんあったと思いま

す。インターネットや新聞など、私たちの周りには、さまざまなメディアがあります。私たちは、それらをフルに活用し、まずは世界を知らなければならないのだということを改めて痛感しました。知識が無ければ何も始まらないのです。だから今の私たちが、今やらなければならないことは、問題を解決するための基礎をしっかりとつくることなのだと思います。それが私たちの権利であって義務だと思います。この新教科の授業はそのキッカケとなりました。これからも、自分の力ですすみつけようと思います。

②環境『ヒトと地球』

【動機が『環境問題の素朴な疑問に対する答えが見つかるか』という生徒のまとめ】

「真実を見ること」これが武田先生がわたしたちに一番伝えたかったことだ。環境問題はみんなで考えなければいけないことなのに、自己中心的に考えすぎなのだ。マスコミの情報を信じないことが一番良いとまでいわないけれど、「本当にこれが正しいのだろうか？」と疑いを持って考えることは「真実を見ること」につながる第一歩になるんじゃないかと思った。

【動機を特には明示していない生徒のまとめ】

常識（とされていること）と現実の間に差が生じてしまっています。情報を鵜呑みにしてしまっている人が多いからではないでしょうか。人から聞いたことを何の疑いもなく信じて受け止める。そういう人が多いからなのではないでしょうか。このような常識と現実の間を埋めるためには、「背景をきちんと学び、現実にかけていることを知る」ということが大事なんだと学ぶことができた新教科でした。また、このことは、これからの人生においても大切だと思うので、心に刻みつけておこうと思います。”ステレオタイプは打破すべき”

③ジェンダー『女と男』

【動機が『最も人間の本质に迫ることができるだろうと思ったから。』という生徒のまとめ】

雑誌「青鞥」で平塚らいてうが『元治、女性は太陽であった』と言っている。聖母マリアや天照大神のように女性がこの世界のはじまりだった。女性には、人間だけでなく、子供を産み育てる能力があるからだろう。人間だけでなく、生物すべてにおいて自分の種を残していくことは非常に大変なことである。その能力を持つ女性を社会はもっと評価すべきだ。評価した上で、女性がソトに出て活躍できるような社会になって欲しいと思う。しかし、子孫を残すことは、男女一対でなければできない。こういった考え方から、男女平等・協力し合うという意識を高めていくべきだろう。

【第二希望でしかたなく授業を受けることになった生徒のまとめ】

世界には人種差別や男女差別など、いろんな差別がまだまだたくさんあります。それらの差別の中で男女差別

は最もしやすい、されやすいものだと思います。それと同時に、最も気付きにくいのもであると思いました。差別に気付かないということは、差別があることが当たり前になっているということです。悲しいです。しかし、いきなり「男女平等」と言ってもすぐには変わるはずがありません。それこそノルウェーのように小さい頃から男女平等の教育をしていかなければいけません。平等というものはとても難しいものです。だからといってあきらめず、まずはお互いを理解するところから始めましょう。そうすれば差別だって戦争だって起こらないはずです。

3) 動機と結果についての考察

生徒の選択動機をみると、テーマが違うにも関わらず、共通の3つの理由に大別できた。①以前から、関心のあるテーマだったから。②自分にとって一番身近なテーマだと思ったから。③ガイダンスの内容やキーワードに興味を持ったから。の3つである。①の以前から関心のあるテーマだった、と生徒が言ってくれのは、テーマを設定した授業者にとって嬉しい限りである。新教科が扱う「今日的」な領域にすでに生徒は興味を持っており、新しい知識を求めていることがわかった。自分にとって一番身近と感じるテーマだ、という選択理由が3つとも書かれていたのにも驚いた。何を以て身近と感じるかは人それぞれである。だからこそ教師は多様な教材を集めていかなければならないと痛感した。

動機によって生徒が考察した内容に違いがあるのか。一般的にモチベーションが低いと得られる結果が少ないと思われる。情意的目標・認知的目標・態度的目標に照らしてみる。情意的目標については、集録を読む限り優位な差は見られなかった。知らなかったことでも授業の流れに沿って知識を得ていけば正しく理解することができる。正しく理解していけば、感動する場面に出くわし、自分なりの意見を持つようになる。差がないのは、授業で大切なのはこの点だからである。認知的目標については、以前から興味を持っていた生徒は語彙が豊富であった。これは自分の考えを深めたり、人に伝えたりするときに優位である。的確に表現することができる。認知的目標に近づきやすい。態度的目標の到達は動機とは関連を見出すことができなかった。研究協議会の公開授業で行ったように、アクションプランを具体化するのには難しく、さらに実行するのは困難である。多くの生徒が自分たちがまずすべきことは、学ぶこと、知ること、だとプランに入れた。どのような動機の生徒も、知ることの大切さが分かれば、きっかけは何であれ今後活かせる。我々はこの講座の態度的目標を掲げた以上、生徒とともに目標達成にむけて、学習内容・学習方法を研究し、正しく学んでいきたい。